

## シラタマホシクサはなぜ減ったのか ～湧水湿地をめぐる自然の変化～

（名古屋大学研究員 富田啓介）

今日は、東海地方を特徴付ける植物群の「東海丘陵要素」とその自生地である「湧水湿地」のお話をします。シラタマホシクサにまつわる4つの話を通じて、その特徴を明らかにしていきます。

### シラタマホシクサとは何者だろう どこに生えているのだろう？

東海丘陵要素とは、東海地方（愛知・岐阜・三重・静岡）の地域の丘陵や台地に見られる小さな湿地（湧水湿地）周辺に固有または日本での分布の中心がある植物のことです（裏面資料参照）。シラタマホシクサやシデコブシなど15種類が知られていますが、その多くが絶滅に瀕しています。東海丘陵要素の自生地である湧水湿地は、一般に思い浮かべられるような湿原とずいぶん異なります。面積は小さく（、丘陵の斜面にもあり、剥き出しの地面が見えている場所もあります。また、養分の極端に少ない湧き水によって成り立っていること、移ろいやすい環境であることなどにも特徴があります。湿地内に養分がほとんどないことは、他の植物の侵入を阻んでおり、その結果競争に弱い東海丘陵要素が生き残ることができたとも考えられています。また、湿地の存続期間が数年～数十年程度という場合さえある移ろいやすい環境は、東海丘陵要素に絶滅危惧種が多いことと大きく関係しています。

### シラタマホシクサはなぜ減ったのだろう？

シラタマホシクサやそのほかの東海丘陵要素が減った原因を掘り下げて考えると、湧水湿地独特の生態に行きつきます。数年前、かつてシラタマホシクサの標本が採集された場所を再訪して確認するという調査を行なった結果、どうやらシラタマホシクサは開発による湿地の破壊だけでなく遷移の影響でも減っているようだということが明らかになりました。遷移とは、時間の経過（環境の変化）に伴って植物の種類が移り変わることです。湧水湿地における遷移は、土地の栄養状態とともに湿潤度とも大きく関係しています。シラタマホシクサは大変湿り気のあ

る場所を好みますから、土地が乾燥化すると瞬く間に他の植物に置き換わって消滅してしまいます。新しい湿地が作られにくい現在において、遷移は大変深刻な問題です。

### シラタマホシクサは里山の植物だった

シラタマホシクサは、かつては人里にたくさん生えていた雑草のような存在でした。現在でこそ、シラタマホシクサは大変稀少な植物として知られています。現在は宅地化が急速に進んでいる名古屋市の東部で、かつての土地の様子を良く知る地元の方々にお話をうかがったところ、「谷のあっちこっちにあった」という声が聞かれました。しかも、「腕輪を作って遊んだ」など、子どもたちの野原遊びに使われてもいたようです。心理的にもとても親しい野草であったといえるでしょう。それが、いつの間にか姿を消し、日常から遠く離れた隔離された場所にある植物になってしまったのです。

### シラタマホシクサは どのようにして守ればよいのだろう？

東海丘陵要素の自生地は、湧水湿地という独特のシステムで維持されている生態系です。その特徴を十分に理解したうえで、保全してゆくことが大切です。湧水湿地は1つ1つが小さく、1つの湿地ですべての種をまかないきれません。また、大変移ろいやすい環境です。東海丘陵要素は、湿地間を自由に移動しながら、全体として命脈を保ってきたと考えられています。そこで、保全を考える際には、1つの湿地を保護するだけでなく、「湿地群」として保全することが大切です。また、湿地の数が少なくなった現在では、遷移を遅らす言わば「延命治療」のような保全方法も必要です。